

# F-40 主婦の被服費の実態と意識について

中村学園 短大 ○山下三枝子 横田春子 松崎ナツ

目的 現在のわが国の衣生活水準は、欧米先進国なみの水準であると云われている。どの家庭も、必要な衣服の量はおよそ満たされ、時、場所、場合に応じ、豊かな美しいよそおいを楽しめる方向がみられる。また一方では、消費者物価は、年々上昇を続けている。今回は特に、家族の消費生活の主体者である主婦自身について、その被服費の実態と意識を調査し、検討を行った。

方法 調査対象は、家庭の主婦で、福岡市およびその周辺（中心地域、住宅地域、農業地域）900世帯について、保育園、幼稚園、小学校、中学校、短大の園児、児童、生徒、学生を通して、母親に調査表への記入を依頼し、数日後に回収した。調査表の記入形式は、なるべく理解しやすく、容易に記入できるものとした。

結果 (1)家庭の被服費については、家計調査報告にみられるように、収入の増加とともに増加しているが、主婦の被服費については、収入階級間、年代間の較差はあまりみられない。(2)主婦の被服費の満足度は、収入階級間、年代間に関係なく、世間一般に比べて普通であると答えている人が圧倒的に多く、所持している被服の満足度も家庭生活をしていく上で普通であると答えている人が多い。(3)今後、合理的な衣生活をしていく上で最も必要と思われるものは、縫製の技術・知識、品質の知識と答えたものが多く、以上のことから、豊かな社会の中で、主婦の被服に対する意識はもつとお金をかけて満足するというより、自由時間の増大、物価の上昇と相まって、自ら製作し、または生活に適合したよいものを選ぶという方向にあると思われる。